

クラス	TU108	担当教員	山本 敏郎
テーマ	生きづらさについて考える		
著書・論文	<ul style="list-style-type: none"> ○『教育改革と21世紀の学校イメージ』いしかわ県民教育文化センター 2000年 ○『学校と教室のポリティクス』フォーラムA 2004年 ○「教育と福祉の間にある教師の専門性」日本生活指導学会『生活指導研究』28号 エイデル研究所 2011年。 		
研究課題等	<ul style="list-style-type: none"> ○「貧困の何を問題にすべきか」『生活指導』2009年8月号 ○「〈格差〉〈貧困〉問題と生活指導」『生活指導』2008年7月号 ○「加害の側の子どもの苦悩に寄り添い、つなげる―〈加害者〉と〈被害者〉との境界線をこえる―」『生活指導』2007年6月号 		
ゼミナール概要			
キーワード：生きづらさ、貧困、虐待、生活指導、インクルージョン、学童保育、当事者性 etc.			
<p>目的、内容、方法、授業計画等：</p> <p>生きづらさ (difficult to live) をかかえて苦しんでいる子どもたちをどう支援できるのか、生きる支えとなる学習をどうつくり出すことができるのかを研究します。</p> <p>生きづらさとは、子どもたちがもっているさまざまな願い―友達がほしい、居場所がほしい、自分のことを認めてほしい、思い切りサッカーがしたい、学校をやめたくない、お父さんと一緒に晩御飯を食べたい…―が、自分の能力以外の理由で、かなえられない状態のことです。また、自分の責任でそうなっているわけではないのに、自分のせいだと思い込まされてしまっている状態のことです。その根底に、経済的困窮、政治的棄民、社会的排除、文化的剥奪、心理的自己否定からなる貧困(poverty)があります。</p> <p>3年生もこのテーマで研究しますが、2年生は、このことをまずたくさん知ることから始めます。虐待、貧困、ワーキングプア、ホームレス、無料塾などにかかわる映像をみたり、資料を読んだりして、私たちにどういう問題を問いかけているかを考えます。</p> <p>もうひとつは、定説・定石・常識を疑う力を身につけること。他人から(友だち、先生、テレビ…)言われると、それが正しいのだと思い込んでいませんか？ その行きつく先が原発問題ですね。たとえば、「ゆとり教育」という言葉があります。しかし、言葉はそれを使うとトクをするというか、都合のいい人が編み出すものです。ですから、「ゆとり教育」という言葉もそれを使うと都合のいい誰かがつくり出した言葉です。自分たちの受けてきた教育が「ゆとり教育」だったと思えば思うだけ、この言葉をつくり出した人の罠にひっかかります。この人たちは、決して「ゆとりある教育」をめざしたわけではありません。</p> <p>騙されないために、定説・定石・常識を疑う力を身につけましょう。</p>			
担当教員からのメッセージ			
<p>あなたたちは、教師や保育士という専門家になるために学んでいます。これまでは高校に入るため、大学に入るために勉強してきました。つまり自分のためです。しかし専門家になるための学びとは、子どもや親のニーズに応える力を身につけるための学びです。ですから、単位を取って資格を取って採用試験に合格すればそれでいいというのではなく、専門家としての実力を身につけることを第一に考えてください。そのための努力はいとわなないようにしてください。</p>			